

## 問に答ふ

■一 色と色との境界のホケてゐるのは如何にしたら出来るや、いくら淡い色から順に重ねていつても矢張クツキリ際立つていかぬ  
■二 日本水彩畫會午前と夜の授業は同様なりや  
■三 ニュートン乾製セピアを使用せるに廣き面積の蔭影を塗ると所々色がかたまる、又洗へば剥げる、セピアはそんなものによ（吉田伊勢雄）  
◎一 強いて剥<sup>ボカ</sup>きなくとも重ねて、いつて離れて見てボケタやうな感じになればそれでよいが、色の境界を弱めるには洗ふのも一法なり、また濡れているうちに他の色をつけるのもよい、濡らして吸取紙を押して取るのもよい、種々にやつて見て自分で發明するのが一番よい  
■二 午後も夜も初學のうちには異りなし、人體寫生に進むやうになつたら午前の方がよい、夜は人體は一ヶ月一週だけなれど畫は毎週ある  
■三 繪具が古くなつた故ならん、熱湯に入れて軟らかにしガラス板の上で少しくグリスリンを混ぜて練直して

見たまへ  
■一 物に強き光線を受けた時は必ず他の色に變ずるものにや、黒塗の板塀の如きは光線を受けし時如何なる色を生ずるや  
■二 稽古用の水彩畫に用ふる紙は何がよきや  
■三 遠景の森に後ろより太陽の照せる時、なたより見たる色の名を問ふ  
■四 ニュートン製チューブ入のバミリオンの中に黒き色混りあり使用して差支なきや（京橋消印の人）  
◎一 太陽の光、月の光、燈火の光それら、相違はあるが、蔭にある時と決して同一の色調ではない、黒板塀の如きは其日光を受けた時間にもより板塀の新古にもより他の反映もあるから、こゝで何の色と何の色を合せよと指圖することは出来ぬ、また如斯は蔭の部分との對照によるべきもので、場合によつては實際よりも明るい色を以て畫く必要がある、實地について經驗され自得されたい  
■二 B印畫學紙の一枚七八錢のものなら使へるが洗ふことが出来ぬ、また快よい空色が出ない、少し高くともワットマンを使用した方がよい、裏表畫いても差支はない  
■三 これも

其距離及森の質によつて相違があるから、實地に寫生して經驗すべきものであるが、概してコバルトにインヂゴを加へ多少のライトレッド又はバアマリオンを混ぜたら近い色が出やう、其分量の如きはこゝに記すことは出来ぬ  
■四 黒い處は捨てたまへ  
■小生は師について學ぶこと一年、鉛筆畫を終りて只今花の水彩畫模寫をやつてゐます、然るに一向上達もせず、模寫も手本のやうな色が出ない、小生は天才は無きものによ、また此位一生懸命にやつても上達せぬものによ（山田晚雪生）  
◎繪の修業は氣永にやらねばならぬ、天才の有無は其作を見なければ斷ずることは出来ぬ、模寫をして色の出ないのは注意が不充分であるからだ、またあまり手本がムツカシクツてもいけぬ、模寫よりも簡單なものから寫生をした方が利益が多い、師に就いて學べば誰れでも早く上達するとは限らない、師の教へ方の良否も大なる關係がある、將來美術家とならうと思ふなら東京へ一日も早く出て來て完全な教授を受けなくてはいけぬ

## 讀者の領分

日本水彩畫會研究所には他の學校のやうに春夏冬の休暇ありや、學期初めは何月よりなりや、寄宿舎の設けありや、また試験ありや（東海畫狂生）◎年末年始に三週間、夏は七月二十日より九月十日迄休み、學科なき故何時にても入學差支なく、また入學試験もなし、寄宿舎の設けもなし、詳しくは規則を取よせ見られよ■小豆島寫生記行の發行所及定價並に『寫生趣味』發行所紫欄會の所在を知りたし（東都の畫狂生）◎前者は日本橋區馬喰町二丁目興文社にして定價金壹圓八十錢位ひの豫定の由、後者は臺北小南門外一丁目三十二、紫瀾會なり■本年夏期講習に出張を受けたと思ひますが、何月頃迄にお願いしたたらよろしいか一寸紙上で伺ひます（兵庫縣有志の一人）只今二三の申込あり、何處でもよけれど可相成は熱心家の澤山集まつた處へ參つた方が自他の都合よき事と思ふ、それには御相談は出来るだけ早く願ひたし、いくら勉強しても一夏に三ヶ所より多くは開けぬから

新年お日出度う、相變らず諸賢の御勇健を祈る（愛知縣夕暮生）■諸君！明けましてお目出度う、今年も不相變繪葉書交換及御交際の程をお願いいたします。新年號の『みづゑ』額縁と繪畫は頗る面白く拜見、「水彩畫の不振」は有益のお話、「三脚物語」は嬉しかつた、原色版は前號よりは感心出来なかつた（神田周三）■『みづゑ』六十九は非常によい出来だ、申分がない、中でも「麓の流」は原畫を見るやうに思はれた（見ないけれど）、記事もいゝ、「春鳥畫談」は讀むでゆくうちひとり二度三度うなづかれた、また七十の「初冬」は實に初冬らしく、「能の面」は僕のやうなものには爲めになる、「雪の山」の松の色（目のさした）はよい、僕はいつも松に失敗するが此繪で大に得る處があつた、近來原色版が進歩したのは喜ばしい事である（大阪洗帆生）■十一月の『みづゑ』（臨時増刊號）の記事中、汀鷗氏の「白峯の麓」の十一節以下十七節あた

りまで藤村詩集を讀むごとき懐かしさを感じた、特にトンボの小屋の一夜は躍如たるものがある（内藤新宿、〇〇生）■眞面目なる肉筆水彩繪葉書交換希望即時返葉（伊豫松山市萱町二丁目七五、吉田伊勢雄）■桑田君にお答申上候、B生即ち小生に御座候、永遠に自然の兒として御交際を願ふ（神戸市京町十番秋馬會々員伴利也）■初學の吾々此度同好數名を得てアケボノ洋畫研究會を起し廻覽畫帖を發行してゐます同好諸君の御賛成を願ひます規定は二錢郵券封入に申込下さい（神戸市兵庫神明町三四、大出方MR）■當地方にも夏期講習を一度開いて下さいいつも關西方面のみでまことに残念に思ひます當地方には各所に温泉場もあり海水浴場もあり會場には困らぬことと思ひます特に松島邊に開かれたら他地方の會員も多く集まりませう幹部及有志の御考慮を煩はします（仙臺河南生）

\*

\*

\*

\*

\*